

社会調査論ゼミ (1998. 10~12)

福武直著『社会調査』岩波書店 (1958)

報告：松井幾子

研究方法としての社会調査はどうあるべきか、保健学の調査が社会調査の枠組み中どのように位置づくかを確認した上で、理論的な調査技術を習得することを目的とし、1996年4月から、本研究室では社会調査論に関わるゼミを継続して行っている。

福武直著『社会調査』は、1997年度テキストとした『社会調査論—社会科学としての社会調査』をはじめ、これまで抄読した社会調査に関する文献には、必ず参考文献として記載されている。多くの研究者に読まれ、支持されている本書を本研究室でも、抄読しておくべきであると考え、1998年度ゼミのテキストとして選択した。

本書は、社会科学の実証性を高めるため不可欠である社会調査の意義を明らかにし、全面的に体系的な説明を加えた概説書として書かれている。

調査を進めていく上で必要な準備段階から結果の処理・分析、報告書の作成・発表に至るまで、具体的で詳細な記載がされている。分析方法などについては、若干時代を感じさせる部分があるものの、研究者にとっては、実際に社会調査を行う際の順を追った詳細な手引書となり得る。

著者は「社会研究の方法としての社会調査は、社会科学的認識を実証科学的知識にするための道具であり、その道具の使い方が調査方法の研究であること。そのため、社会調査の方法は、単に抽象的に研究されるだけでは意味をなさず、現実の方法として社会研究のために使用されて始めて意味をもつ」と繰り返し述べている。

昨年度のゼミでは、「調査主体のもつ立場性」、「対象の社会的位置づけの作業を十分行う典型化」、「数量化的把握信仰への警鐘」に

ついて深く学んだ。今年度採用した本書は40年余り以前に著されているにもかかわらず、統計的量的方法が将来性と必要性を見通しながらも、その方法が社会科学の本質を誤る恐れがあるということも指摘している。「立場性」や「典型化」についても、この時代、既に再確認されているにもかかわらず、その重要性を認識した調査が、今日確実に成されているとは言い難い。社会調査のあり方は、もう一度原点に立ち返るべきであると言えよう。

本書を抄読することで、現在、社会調査を研究方法として用いようとしている本研究室の院生は、それぞれが、自分の研究においてどのような立場にいるか、調査対象は果たして的確に抽出されているだろうか、分析方法は安易な方法に走らず熟考し選択しているか、など改めて各々の立場性や調査の典型化、調査方法の検討を振り返る機会を得ることになった。また、社会調査の方法史を知ると言う点でも、本書は十分有効であったと考えられる。